

「盟約」 1

魔道祖師／陳情令

柊 かりん

目次

第一章 遭遇 ……	9	第五章 謝罪 ……	55
第二章 異変 ……	16	第六章 画策 ……	64
第三章 行動 ……	32	第七章 本心 ……	74
第四章 懷疑 ……	49	第八章 恋慕 ……	87
		第九章 再会 ……	104
		第十章 告白 ……	120
		第十一章 兔子 ……	150
		第十二章 寂寞 ……	168
		第十三章 信息 ……	175
		第十四章 震驚 ……	178
		第十五章 懷古 ……	189
		第十六章 生日 ……	208

登場人物

【藍湛】

主人公の「男」＝藍湛。

かつての「藍忘機」の生まれ変わり。

過去の記憶を持っていて、「一緒にいる」と誓い合った魏無羨のことを探し続けている。

【魏嬰】

主人公の「男」が出会った女の子。

実は女装をしているだけの男子大学生。

「魏無羨」の生まれ変わり…？

【江澄】

魏嬰の弟のような存在。江厭離の実弟。

魏嬰は良き友でありライバルであり…。

【江厭離】

魏嬰の姉のような存在。江澄の実姉。

魏嬰を「阿嬰」と呼ぶ。

【聶懷桑】

魏嬰と江澄の学友。

魏嬰を「魏姐さん」、江澄を「江兄さん」と呼ぶ。

大切な約束を交わして一生を終えた忘義の転生物語。

△女装描写があります。性的表現は少なめです。

△作者の独自設定を含みます。お許しいただける方のみ閲覧推奨です。

△時代設定は「現代」としており、

極力現実味が出るよう、なるべく現地の法律など調べているつもりですが、

演出の都合上、現実とはかけ離れている設定・展開があることをご了承ください。

第一章 遭遇

ひとつの小包を手には、静かに扉の前に立つ。とある大きな一軒家の目の前で、一人の男は微かに高鳴る心臓をどうにか落ち着かせようと必死だった。

小包に貼られた伝票には、見覚えのある名前が印字されている。一字も違わぬその名前を、自分が見間違ふことなどありえない。もう一度それを確認するように、何度か心の中で復唱してから「ごくり」と唾を飲み込み、意を決して門の脇にある呼び鈴を押した。

「はい」

しばしの沈黙のあと、微かなノイズに混じり間延びした気だるそうな声が聞こえた。電子音に混ざるそれは、少々高めの男の声のようだが、小包の宛先は女性の名前なので、きつと受取人とは違う人物なのだろう。

——宛名の本人が出て来てくれたら、自分が知るそ

の名の持ち主かどうかをこの目で確認できるのに。

そう思いながら、自らがこの場所を訪ねた理由を簡潔に伝える。

「解錠するから、中まで入って来て」

機械越しにそう指示をされ、ほどなくして目の前に建つ門の錠が「ガチャリ」と重々しい音を立てて外される。恐る恐る手を伸ばすと、軽く押しただけで難なく門は開いた。まるでそれは、無言で客人の進入を歓迎しているようでもありながら、近くに主が居ないこの場所では、自分が不法な手口での侵入に成功しようとしているようでもある。

内心微かな罪悪感を覚えつつも、敷地内へ足を踏み入れ、門を閉めて改めて屋敷を見た。

この辺りでは有名な資産家の家らしい。大学への進学を機に別な地方から出て来た自分にとって、この都市で見るものはすべてが新鮮なものに見えてしまう。豪華絢爛と言っても過言ではないであろうその屋敷は、なるほど、かの有名な一門を名乗るものの所有であれば頷ける。

ひとつため息をついてから、男の声が言った通り屋

敷へ向かって歩いて行く。前庭の片側には美しい花々がたくさん咲いており、もう一方には広く池が掘られていた。そこに魚類が泳ぐ姿は確認できなかったが、比較的きれいな状態に保たれている池の水は、もしかすると夏になれば美しい蓮の花や葉で埋め尽くされるのかもしれない。それはまるで、かつて見た蓮花の名を冠する湖を見るようで、心なしか胸が踊るように感じた。

門から建物までは、ゆったりと歩いて三分ほどの距離だった。見回す景色すべてが花々に埋めつくされ、業務中であることもうっかり忘れそうになるほどの美しさに囲まれながら、ようやく目的の建物へと辿り着く。玄関前に立ち、いくらか経たぬうちに扉が開いたと思うと、そこから姿を現したのは、何よりも誰よりもよく知る者の姿だった。

開いた扉の向こうから姿を現したのは、色白だが健康的な肌色をした一人の女性だった。どこか違和感があるように感じるの、細身だが比較的背が高く、肩周りもしっかりとして見えるからなのだろう。けれど、全体的な印象は「可愛い女性」といった様相だっ

た。目は大きく幼さを残し、滑らかな肌にはほんのりとした色付いた頬、潤いのある唇は、一般的な「女性らしさ」を備えているように見える。

記憶に残る姿とは似ても似つかないその姿には、どうしても疑問を抱いてしまうのだが、服装はどう見ても「女性」そのものだった。膝下までの長いスカートを穿き、袖や襟元にはフリルをあしらったブラウスを身に着け、腰までの長い髪は赤色の髪紐で頭の高い位置に結わえている。

「……あの？」

相手の姿を見た途端、ぽかんと口を開けたまま固まってしまった男と、その様子を見てどう対処をしたものかと咄嗟に悩みつつ固まってしまった屋敷の住人である女性。二人はそのまましばらく見つめ合っていたが、怪訝そうな女性の声で、男ははっと我に返った。